年　組　名前

道新でワークシート

厳冬期のドローン 道が飛行実験へ

電池消耗や凍結 普及に課題

道は新年度、冬季の低温や降雪下でドローン（小型無人機）を安全に飛ばす実証実験に着手する。新規事業として関連費2千万円程度を2022年度予算案に計上する方針。ドローンは物資輸送や災害の初期対応など幅広い活用が期待される一方、厳冬期のバッテリー消耗やプロペラ凍結などの課題もあり、道内での普及の足かせとなってきた。結果を民間にも生かしてもらい、ドローン事業の展開を後押しする。

北海道ドローン協会（札幌）によると、寒冷地対応の実証実験は国内で珍しい。ハイテク機器や情報通信技術（ICT）を社会的課題の解決に活用する道の政策「北海道ソサエティー5・0」の一環として行う。

実験は民間メーカー製のドローンを使い、冬に低温や雪の機体への影響を確認し、対応法を模索する。実験結果は道内市町村と共有し、民間企業などが役立てられるように一般公開も目指す。

市販のドローンの動作には氷点下10度程度以上が必要とされており、冬季の利用には限界がある。同協会は「厳寒期にドローンを飛ばせるようになる利点は非常に大きい」と話す。

道のドローン活用はこれまで、野生動物の生息調査などにとどまってきた。今後、災害発生時の初動対応として上空から被災状況を撮影するほか、公共施設を点検するなどの活用策を検討していくとみられる。

道内では十勝管内上士幌町が昨年秋にドローンで食品を民家に届ける輸送実験を行ったほか、旭川市や石狩管内当別町でも民間企業などによる同様の実験が相次いでいる。政府は早ければ22年度、現在は禁止されている有人地帯での目視外飛行を解禁する方針で、ドローンを使った輸送事業が加速する可能性がある。

（佐藤圭史）

道が想定する地域でのドローン活用法

- 過疎集落などへの荷物の配送
- 大規模災害時に上空から被災地を撮影し確認
- 野生動物の追い払い
- 人の入れない山奥での上空からの森林調査

※北海道ソサエティー5.0推進計画に基づく

2022年2月12日（土）　朝刊　全道版　1ページ

①道内でドローン普及の足かせとなっているものは何か書きなさい。

②厳寒期にドローンを飛ばせるようになる利点とはどのようなことか、書きなさい。

③北海道の自然環境がもつメリットとデメリットを整理し、ドローンに関して、その他にどのような活用方法が考えられるか、自分の考えを書きなさい。